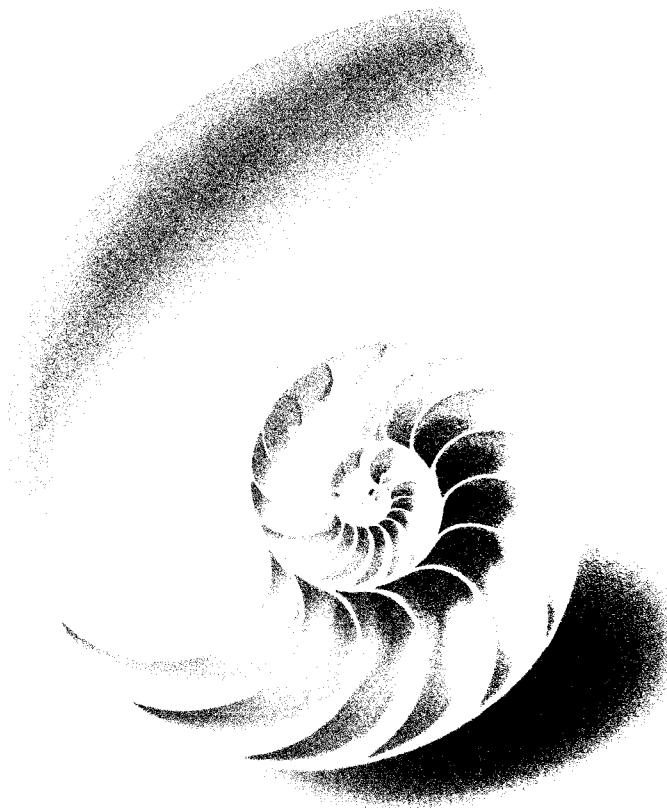


第2回

文窓賞優秀作品集



2008年9月発行

神戸大学文学部同窓会

Cheer Up ! 神戸大学 !

文学部 東洋史学専修

近藤 江梨圭

Kondou Erika

神戸大学生になっておよそ三年半、そして同じく神戸大学の応援団の団員になって三年半が経つ。つまり、私は神戸大学生になると同時に神戸大学の応援団員となり、神戸大学生として過ごしてきた時間は、イコール神戸大学の応援団員として過ごしてきた時間である。応援団ライフが私の学生生活そのものと言っても過言ではない。

神戸大学の応援団とは何か。私自身、当初は全く理解していなかった。

「チアリーダーの衣装を着て試合の応援をするのは楽しそうだな」

「友達も増えそうだし楽しそうだな」

この位の考えで一瞬にして応援団の一員になった。

大学生活と同時に応援団生活が始まり、特にやりたい事もなくて、無色の状態だった私はみるみる応援色に染まり、ハマっていった。それだけの魅力が応援団にはあった。

誤解している人も多いと思うが、また、私も誤解していたが、応援団はアメリカンフットボールや野球といったメジャーな感じの体育会のクラブの試合を応援しに行っているだけではない。応援に関して言えば、応援に行く対象は体育会全てであり、中には柔道の様に試合中は静粛にしていなければならない為、正装（応援団の制服）で静かに観戦するという驚きの応援だってある。更に、文化系のクラブだって応援

に出向いて行く。その部の大きな発表の場に全員で成果を見に行く、これが私たちの応援である。

試合や発表会を応援しに行くだけではない。様々な団体を集めて交流会を行ったり、一般学生に学校行事や課外活動の活躍を知らせる為にビラを作って配ったり、学校行事の運営を手伝ったり、全学規模の大きな行事で企画やステージをやったりとその活動は多岐に亘る。

色々な人と関わり、色々な事に挑戦できる。それが私にとっての応援団の最大の魅力であり、「こんなに色々な事が出来るなんてお得だな」と思っていた。

と、まあ下級生の頃はこの程度の事しか考えていなかったが、実は応援団はそんな私の未熟な考えをはるかに超える、すごい団体だったのである。

応援団というのは一言で表すと、「神戸大学を応援する団体」である。応援団の願いは、どこかのクラブが試合に勝つとかそんなちっぽけな事ではなく、神戸大学が最高の大学である事だ。

最高の大学とは、どんな状態であるのが良いのか。

大学は色々な事を自由に出来る分、全体としての勢いやまとまりといったものが存在し難く、神戸大学も現状としてそういう状況にあると感じる。また、大学を只の通過点として考

えている人が多いとも感じる。しかしながら、神戸大学はこれまで沢山の人々によって築いてこられたものであり、現在神戸大学に関わっている人達もせっかく神戸大学を築いていく一員となっている為、大学に関わっている人々がそれを意識する事が出来、充実した大学生活を送る事で、大学が盛り上がっている活き活きとした状態を作りたい。そして、誰もがその盛り上がった神戸大学の一員となり、神戸大学に対して誇りや愛着を持っている状態になって欲しい。大学が盛り上がり、そんな大学を好きになり、それによって大学が更にもりあがる。この相互関係が最高の理想の状態であると考え、私達応援団の最大の目標としてその状態を「神戸大学の意気高揚」と表して掲げている。

応援団は実はそんなデカい野望を抱いてい、とてもスケールの大きい団体だったのである。

私が「色々な事が出来てお得だな」くらいにしか想えていなかった様々な活動も実は全て、この「神戸大学の意気高揚」に繋げる為の活動であった。例えば、交流会は単に自分が色々な団体の人と友達になれるだけでなく、むしろ参加者同士を繋げて、新たな関係を創り出し、それによって大学全体に広がる広いネットワークが出来、神戸大学という媒体を通じた仲間意識の形成が見込まれるものであるし、情報をビラにして配る活動は、あらゆる人と直接的に接する可能性を秘めており、こちらが発信する情報によって、その多岐にわたる人々が新たに神戸大学の物事に興味、関心を抱いたり、神戸大学内の物事に影響を受けて自身のモチベーションを上げる事に繋げる事が出来る。応援団が当たり前に行っている応援だって、単にその試合に勝つ為だけではなく、その場にいる人全員の気持ちをまとめ、神戸大学という一体感やまとまりを作る事で、選手、観客共に神戸大学として

の仲間意識を持つ事に繋がるし、特に応援する対象である選手については、その試合に終始せず、今後の活動に向けての間接的な後押しとなり、そんな団体が増える事は神戸大学の活性化の繋がる。

応援団が様々な人々と関わり、様々なジャンルの活動を行っているのは、大学に関わる様々な、あらゆるコミュニティや個人に対して、様々な方向から働き掛けを行っているからなのであった。

上回生になるにつれて、そういった事を理解する事が出来、そんなスケールの大きい活動が出来る応援団がある事の凄さを実感するようになった。

そんな応援団としてこれまでやってきて、「神戸大学の意気高揚」はどれ位達成されてきたのかというと、まだまだ達成には程遠い。もっと言えばどれ位達成されているかなんて、私には分からぬ。

達成度を測る指標もないし、一人ひとりが神戸大学とどう関わり、どんな思いを持っているかなんて分かる術もない。更に言えば、私は「神戸大学の意気高揚」という目標にゴールなんてないと思う。なぜなら、誇りや愛着という気持ちには際限なんてないし、盛り上がっている状態に限界なんてないからだ。いくらでも上を目指せるのである。私達応援団内ではよく言っていることだが、「応援団」としてのゴールは「応援団がなくなる事」だ。

何も、人数不足でやむなく廃止に追い込まれるという事ではない。

応援団という存在がなくても、頑張っている部があればそれを応援したいと思う人が沢山集まり、友達を増やしたい人が集まって自主的に交流会を開いて繋がりを増やし、学校行事ともなれば自然と数え切れない参加者が集まり、更には学生が学校行事を行うようになる。

ここまで持ってくれればあとは神戸大学生自身が自然とより良い大学を作っていくけるはずだ。これが三年半を経て自分なりに理解した応援団の正体であり、ゴールである。

奇麗事を述べてきたが、実際、応援団として活動してきた三年半では、神戸大学内で成果をあげたというよりも、自分自身が得る事が出来たもののが多かったというのが正直なところだ。

先にも少し述べたが、私は本当に無色の状態で神戸大学にやってきた。やりたい事も、理想も、好きな事すらもなかった。今さらながら、本当にどうしようもない状態だ。

応援団員として過ごす中では、常に誰かと関わってきた。それは、働き掛ける対象であったり、一緒に活動していく仲間だったり、とにかくいつも誰かから見られるという状況におかれたり。

その事によって得たものは大きい。

「応援団 Spirit」が身に付いた。「誰かを盛り上げる以上、自分は常に元気でいなければならない。たとえ辛くてもそれを表に出してはいけない。」応援団員になってから常に言われ続けた、そして言い続けている事である。勿論、最初から出来る事ではない。出来るようになるのは、本気で、心から応援したい、盛り上げたいと思えるような繋がりを感じるようになってからである。普通に大学生活を送っていたら、自分以外の人に、こんなに一生懸命に元気を伝えたいと思う事はなかっただろう。

また、色々な人と接する事で、自分の振る舞い一つ一つを強く意識するようになり、どういった言葉や行動が相応しいのかを考えて過ごせるようになった。

まあ、これらは課外活動をやってきて得たメリットに過ぎないのだが、私が得た何よりも大きな収穫は自分と向き合う事が出来たという事

である。

前述の通り、私にはやりたい事も夢もなかった。自分が好きな事すら分からなかった。大学生活も半分以上を終えて、将来の事を考えなければならぬとなった時、手掛かりとなったのは応援団として活動してきた事だった。

応援団としての活動の中には、「その場にいる人をどうやって楽しませるか」という事を考える機会がとても多くある。具体的には、学園祭のようなステージ上で一般のお客さんを集めての企画を考えたり、交流会で集まった人が皆で出来るゲームを考えたり、新入生を勧誘する為にイベントを考えたり、といった具合である。

自分の好きな事を探そうとして振り返ると、私は人を楽しませたり、驚かせたりするようなアイディアを出して、案を練り、こだわって準備する、という活動工程がとても好きであり、得意である事に気付いた。そして、実際に相手が喜んだり、元気になったりするのを見て、自分も大きな喜びを感じるという事にも気付いた。

これが私自身の大きな答えであり、今後に繋がる大事な発見であると感じている。

一般的な就職活動の開始時期にはこの答えが自分の中に見えておらず、開始する事が出来なかつた。

大学入学当時、やりたい事もなく神戸に来た私にとって、ゴールは大学合格であり、その先には何もなかった。その為、ここで就職活動を強行突破すると、運良く就職出来たとしても、また入学当初と同じ状況を繰り返してしまうを感じた。だから、時間がかかっても本当に好きな事を探そうと思った。

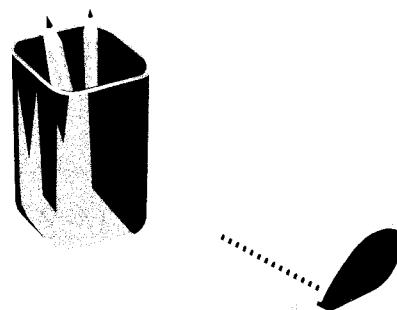
少し話は逸れたが、自分が一生懸命やってきた応援団の活動だからこそ、その中に自分自身の手掛かりがあると信じていたし、それを無駄にしたくないと思った。

もう一年、大学に通う私が言うのもなんだが、大学で一生懸命取り組んでいる物事がゴールではないし、就職する事がゴールでもない。「神戸大学の意気高揚」と同様に自分にもゴールなんてないのだろう。

何だか哲学的な話に走ってしまった感はあるが、何が言いたかったかというと、応援団としてやってきた事で、単なる課外活動で得られるメリット以上に、私は、これから自分の自分に通じる沢山の道しるべを得る事が出来たと感じている。

とはいって、まだまだ第一線で活動中なので、残り少ない応援団員でいる事の出来る時間を全力で過ごし、神戸大学を少しでも意気高揚に近付けていきたい。

そしてその先もずっと、自分自身の応援団でありたいと思う。



「普通」でない子供たちに会って

文学部 社会学専修

高内 江梨子
Takauchi Eriko

日本全国で不登校とされる小・中学生は十三万人。大体クラスに一人いる計算になる。私がその十三万分の十人と会ったのは、大学三年生になってすぐのことだ。

大学に入りたての頃から、学校に行けない子供たちと関わる活動をしてみたい、と頭の隅で思っていた。それでも、三年になるまでずるずると何もしないで来たのは、私の怠惰の結果だが、最終的にあの場所にたどり着けたのは、本当に幸運だったと今は胸を張って言える。

明石市適応教室、通称「もくせい教室」。私の有償ボランティア先だ。海沿いの小学校を間借りしたフリースクールで、学校というよりも、小さな児童館といった印象だ。教室はたった五つ。職員室、応接室、勉強用の教室、和室、遊戯室。そこで、十人前後の学校に行けない子供たちが、平日のひと時を過ごしている。勉強をしたり、運動をしたり、本を読んだり、昼休みにおしゃべりをしたり。週五回遅刻せずに来る子もいるが、たいていは皆、思い付いたように来て、休みたい時に休み、遅刻したい時に遅れてくる。少ない時で三人、多くても七人、出揃うのはたいてい昼過ぎだ。

そこで私はメンタル・フレンド、通称メンタルと呼ばれている。勉強教えたり、一緒バトミントンしたり、机を囲んで昼食を食べたり、どうでもいいようなおしゃべりをしたりするのが、私の任務だ。親でも、先生でも、兄弟でも、

友達でもない、微妙な距離感で、中学生の子供たちと日々向き合っている。

たった半年。週に一度だけ。私が「もくせい」の子供たちと関わったのは、ほんのわずかな時間だ。でも、その中には、他では気付けなかつた発見、見えなかつた風景が、無数にあった。そこで得たキラキラした何かを、ここに紹介してみたい。

①学校に行かないということ

「もくせい」に通うようになって、最初に感じたのは、ごくごく当たり前のこと、単純すぎて、言葉にするのも陳腐なくらいの事実、色々な子がいるという事実だ。そのうちの何人かについて、少し書いておきたい。

Mちゃんは、「何で学校行けないんだろう」と首をかしげてしまうくらい明るくて、携帯を手放せない今時の中学生。Aちゃんは、目を輝かせて大好きな小説や漫画の話をする子。H君はつっぷして寝てばかりなくせに、卓球やバトミントンにはやたらとやる気を出す。O君は口が悪くて毒舌だけど、ふとした瞬間に友達に優しい言葉をかけられる。Nちゃんは、憧れの高校を目指して中学に復帰中。時々疲れて充電にやってくる。

このように、不登校というイメージではなく、それぞれの形がある。だが、一方で、共通しているなと感じる部分も確かに存在す

る。そのうちの一つは、メンタルに気を許すと、一様にノンストップ弾丸トークということだ。「しゃべりたいことが、あるの！聞いて！」と全身で叫ぶように、話してくる。

話す内容はそれぞれだ。親の話、友達の話、テレビの話、芸能人の話、漫画やゲームの話、時には「もくせい」の先生やメンタルの悪口だったりする。他の子たちが、学校で友達にぶつけरような、ごく普通の世間話をストレートに投げてくる。三人いれば、同時に三者三様の話をしたりする。聖徳太子になった気分だ。それぐらい、みんな「話すこと」に飢えていて、上手く発散できていない。学校に行ってないため、聞いてくれる友達がそれだけ少ないということなのだろう。

そこで思うのが、中学生の交友関係が、極端なまでに偏っていることだ。おそらくほとんどの中学生が「友達＝学校の友達」だろう。これは、あまりに閉じられた狭い世界だ。かりに、その世界からはじき出されてしまったら、どうなるのだろう。下手をすれば、今まで構築してきた交友関係を全て失いかねない。

だからこそ、私は「もくせい教室」がとても貴重な場所だと思っている。学校じゃない、ほんの少し自由な場に、自分と似たような状況の人たちがいる。学校という絶対的な場所からはみ出した人たちと、一緒に過ごせる場所がある。自分とは違う考え方を持った多種多様な人たちと、出会い関わる機会がある。これは、多感な中学時代に、必要不可欠な経験だ。「もくせい教室」はその経験を確実に与えてくれる。

さらにもう一つわがままを言うなら、そこで出会う人たちの中から、大事だといえる誰かを見つけてほしいと思う。中学時代を思い出したとき、真っ先に頭に浮かぶような誰かを。それはきっと、学校に行かなかったからこそ、出会えた誰かに間違いないのだから。

②勉強ができないということ

次に、中学生が避けては通れない、勉強の話をしてみたい。

「もくせい」にやってくる子たちは、ほとんどが勉強嫌いだ。苦手、できない、さらにやらなくなる、という悪循環に陥ってしまい、やる気と自信を喪失している。

中学二年生のMちゃんは、その典型だった。算数が大嫌いで、数字にアレルギー反応を起こしていた。少数の掛け算、分数の割り算ができない。パーセントの概念が理解できない。筆算が苦手で、マイナスの計算になると手が出ない。二桁以上の計算に、携帯電話の電卓機能を使ってしまうこともあった。

他の子たちも、似たような状況だった。英語について言えば、アルファベットの順番がわからない、aやtheの使い方を覚えていない、doやmyといった基本的な単語のスペルが頭に入っていない、といった具合だ。

中でも、私が最も印象に残っているのが、中学三年のY君だ。ほとんどしゃべらず、教室の隅でじっとしているような男の子で、彼が自己紹介カードを書いたときのことだった。ふと見ると何度も消して書いてを繰り返している。何を書いたらいいか迷っているのかな、とそのときはあまり気にしなかった。だが、後になって気が付いた。Y君は平成の漢字が書けなかったのだ。自分の生年月日が書けずに困っていたのだ。その事実に心底驚き、またそれを思いつきもしなかった自分に腹が立った。

彼らの「勉強ができない」レベルは、成績がどうこうといった問題ではない。私は、一体何度、「小学校の教員は、この子に何を教えていたんだ！」と叫びそうになったか分からぬ。そんなレベルなのだ。

勿論、学校に行ってないからといって、必ずしも勉強ができないとは限らない。だが、学

校に行くということが、最低限の学力を確保する、強力な「網」であることは確かだ。「もくせい」の子たちには、その「網」がない。これは、私たちが想像する以上のハンディキャップだ。

だが、ここで一つ立ち止まって考えてほしい。はたして「勉強ができないこと」はそんなに悪いことなのだろうか。中学で習う方程式など、大人になっても役に立たないのだとしたら、勉強なんかできなくてもかまわないのではないか。

これに関して賛否両論はあろうが、一つだけ断言できることがある。学校主体の社会において、勉強ができないということは、自信を失うということなのだ。特別な才能を持った人や、勉強以外に得意なことがある人は別かもしれない。だが、多くの子供たちは勉強を通して、達成感や向上心を磨いていく。テストで良い点数が取れたときの達成感、できない問題が解けたときの充実感、がんばったねと褒めてもらったときの誇らしさ、こういった感情を通して、私たちは「自分だってやればできる」という自信を獲得していく。

数学が苦手なMちゃんは、「こんなん、できない」をよく連発する。問題が解けたときの充実感や達成感を、これまで経験してこなかったのだ。だからこそ、「やればできる」と信じられないのだ。これは、彼女の人生において、とても不利益なことではないだろうか。おそらく、「勉強ができない」という事実そのもの以上に。

勉強なんてできなくてもいいのかもしれない。でも、「やればできる」と自分を信じられるようになってほしい。分数の割り算や英語のつづりを教えながら、私はいつもそう願っている。

③普通ということ

「もくせい教室」のメンタルの多くは、教員

やカウンセラー志望だ。一方、私はというと「教師はなりたくない職業ベスト10に入る」と公言してやまない人間だ。では、なぜそんな私がこのボランティアを始めたのか。それは、私もかつて登校拒否児だったからだ。

小学生時代のほんの一時、私は学校へ行くのを拒んだ。また、かろうじて登校していたものの、5・6年に通った小学校は大嫌いだった。「受験に失敗したら、近所の中学には行かない」と心に誓っていたし、卒業式で号泣するクラスメートを見ても何の感慨も浮かばなかった。無事私立の中学に入学して、私はようやく「学校って楽しいんだ！」と心の底から感じられるようになった気がする。

私が「もくせい」の子たちと関わりたいと望むのは、かつての経験が根底にあるからだ。学校嫌いで登校拒否児だった私は、確実に一つのことを学んだ。「普通」でなくても生きていける、でも「普通」でないことはとても不便だ、と。

だからと言って、人一倍彼らの気持ちが分かるんだなんて、馬鹿なことを言うつもりはない。みんなそれぞれ、十人十色の事情があって、理解できるなんて口が裂けても言えない。でも、かつての自分を思い出した時、私は「もくせい」の子たちに、尊敬せずにはいられない。

「もくせい教室」に来るということは、不登校の自分を認めるということだ。学校に行けない自分を肯定して、その上で今自分がどうすべきなのか考えることだ。学校が絶対的な存在である子供社会で、それは想像以上に大変なことだ。

もし私が中学生だったら、きっとできない。家を出る度に悩み、無駄なことを考えて、きっと動けなくなるだろう。

同じクラスの子に会ったらどうしよう。指差されて、何か言われたりしたらどうしよう。近所の人に「学校どうしたの？」と訊かれたら、

何て答えたらいい？

そんなこと、考えて、きっと昼間は家からも出られなくなる。

「もくせい」に来ている子供たちも似たようなことを思っている。同じ中学の制服を見ただけで、物陰に隠れようとする子だっている。それでも、親にせっつかれたり、家の居心地が悪かったり、出席日数が稼ぎたかったり、友達に会いたかったりして、あの場所にやってくる。

これは勇気がないとできないことだ。勉強、スポーツ、教養、コミュニケーションと、まだまだトレーニングは足りないけれど、彼らは頭が下がるくらい勇気のある子たちだ。その勇気に、私はいつも感服する。

しかしながら、この勇気が他の人には理解されにくいものであることも、分かっているつもりだ。「普通」じゃないということは、見えないということだ。日常生活を生きていると、私たちは彼らの存在に気づかない。学校に行っている間は、彼らに出会うことも関わることもない。

もっと、知ってほしい、と強く思う。学校に行けない、行かない子供たちが送っている彼らなりの日常を、色んな人に見てほしい。外れた人たちが着実に作っている毎日を、感じてほしい。そこから得るものは、「普通」に生きていたら、見逃してしまう何かだ。それは、手放すのがもったいなくらいキラキラしていて、私たちが当たり前に通り過ぎていく物事を問いかけている。そう、それは例えば「普通って偉いの？」という一言だったりするのだ。

「もくせい教室」に行くようになって、何度も自分の無力さを痛感させられた。勉強してもスポーツにしても、私に教えられることは何もない。「何かを教えられる」なんて思うこと自体が傲慢にすら思える。私は与えられてばかり

りだ。中学生たちに、励まされたり、元気をもらったり、後ろをせっつかれたりしている。

特に、Aちゃんがくれた一言は、私の何よりの宝物だ。私の行く水曜日にはいつも顔を見るので、「毎日来てるの？」と聞くと、どうやらそうでもないらしい。「だって、水曜日にはハニー（私のあだ名）がいるから」。その時、私がどんな気持ちだったか、きっとAちゃんが知ることはないと思う。

半年間のうちに、私はすっかり彼らに入れ込んでしまった。その交わりのなかで、今心から伝えたい祈りがある。学校に行けても行けなくても、彼らの今日が楽しい日であればいい。今日が楽しくないなら、明日は良い日になるように、楽しかったなら明日はもっと良くなるように。そんな風に、祈りながら一歩一歩毎日を過ごす彼らのそばで、私も少しづつ成長していきたい。



『打倒、ムコジョ。』

～学生記者 ROOKS 取材記～

文学部 社会学専修

塚本 京平
Tsukamoto Kyouhei

僕の寿命はあと1年。残された時間は少ない。

と言っても僕はドラマの主人公ではない。もちろん実際に命を失うわけでもない。

単に、ただ単にあと1年で会えなくなってしまうだけのことだ。最愛の恋人に。

2007年もスポーツ界から多くの名選手がフィールドを去っていった。サッカーの闘将・秋田豊、テニスの女王・マルチナ＝ヒンギス、そしてミスタープロ野球・古田敦也。来年は僕もここに名を連ねることになる。

そう、あと1年しかないのは僕の選手寿命だ。引退が実力、意思に関係なく訪れる学生スポーツの宿命。だが僕は実際にプレーする選手ではない。マネージャーやトレーナーでもない。一体僕は何者なのか。

ともかく今日も試合が終わった。20点差以上の大勝も、僕の仕事はまだ前半。選手をつかまえ名刺を渡し、後半開始の笛が鳴る。

「お疲れ様でした。まず今日の試合内容について…」

僕は選手と同じフィールドに立つ、記者という名のプレーヤー。神戸大学NEWSNET委員会に所属している。束縛の少ない学生記者は、好きなスポーツを好きなだけ取材することができる。何よりの醍醐味は同じ学生として、友人

として、誰よりも選手の内面を知り、誰とも違う視点を持って取材に臨めること。僕にしか聞けないクエスチョンはこの世界にあふれている。

「テストもうすぐやけど大丈夫なん？」

「身長173cmって書いてあるけど実際なんぼ？」

全てを記事にする必要は無い。ほとんどは取材の研究材料。残りは僕自身が取材を楽しむための小道具。インタビューは時に何よりも詳しく、何よりも面白い最高のガイドブックとなる。こんなに楽しい取材生活も残り1年になってしまった。

さて今日の取材対象は、女子タッチフットボールチーム・神戸大学ROOKSである。彼女は僕が恋心を抱く、特別な存在。何よりの魅力は強さ。1994年のチーム発足以来、春1回、秋5回の関西制覇を収めている。恋の始まりは2006年12月、耳に挟んだ同僚の会話だった。

「ROOKS東西王座惜しかったなあ」

「ほんまやで。あと一步で日本一やったのに」

日本…その言葉に導かれ、僕は情報収集を始めた。NEWSNETの過去記事は、ウェブ上に掲載されている。最初に見つけたのは4月の記事。

『タッチフット決勝逃す 武庫川女大に敗北——2006春季関西学生女子タッチフットボ

ルトーナメント準決勝が4月23日、王子スタジアムであり、神戸大は武庫川女大に19-27で敗れ、決勝進出を逃した。【4月23日 神戸大NEWSNET】

僕の記事だ。しかし半年以上前で、ほとんど印象に無い。次に東西王座について調べてみる。その記事は2週間ほど前にあった。

『王者へあと1TD 女子タッチフット——女子タッチフットボール第15回東西大学王座決定戦「プリンセスボウル」が11月23日に王子スタジアムであり、神戸大は決勝戦に進出するも、武庫川女大に27-32で敗れ、学生王者にあと一歩とどかなかった。【11月23日 神戸大NEWSNET】』

国立大という理由から強い部活探しを諦めていた僕にとって、想像もできない衝撃的な記事。これこそ僕が求めていたものだ。強いチームには必ずドラマがある。ROOKSの日本一を見届けたい。そこに隠されたドラマを伝えたい。恋心が芽生えるまで、時間はからなかった。

僕のROOKS取材が始まった。過去の記録収集から春休み練習特集、そして春季トーナメント。秋に向け、できる限りのデータを集めた。日本一への最大の敵はムコジョこと武庫川女子大学。大学最強の座に長年君臨し続けている。関東は敵ではない。ムコジョに勝って日本一。選手は口をそろえた。しかしリベンジをかけて臨んだ春トーナメントは決勝でまたしてもムコジョに敗退。全ては秋へと持ち越された。

秋季リーグ上位2校が出場できる全日本大会の東西王座決定戦、その優勝校のみが進めるさくらボウル。ムコジョへのリベンジを果たし、日本一になるROOKS物語。僕はその全てを見届けるため、夢の舞台まで取材に行き続けると決めた。

『完封勝利も課題残す 日本一へROOKS再

始動【9月9日 神戸大NEWSNET】

『関学下して連勝 女子タッチフット【9月16日 神戸大NEWSNET】』

『逆転勝利で優勝に王手 女子タッチフット【9月30日 神戸大NEWSNET】』

秋季リーグ開幕。ただただ圧巻勝利が続く。ムコジョとのリーグ最終戦はともに東西王座決定戦の出場を決め、「関西王者」の称号を賭けた戦いとなった。

10月28日、ROOKS対ムコジョ。意地と意地との戦いが始まった。この日はROOKSの攻撃陣が機能し、一進一退の攻防を繰り広げる。すると前半終了間際、反則で得たチャンスからQBがランで中央突破し勝ち越しタッチダウン。パス攻撃が中心のROOKSで、今まで僕が見たことの無いプレーだった。

やられた。「隠しているものなど無い」というコーチの言葉を信用していたのが甘かった。自分自身の取材不足を痛感しながらも、挑戦者ROOKSが7点を勝ち越し前半が終了した。

後半、ムコジョは逆転へ怒涛の攻撃を仕掛ける。ROOKSにとって嫌な時間帯が続いた。しかし4年生センターのビッグプレーが雰囲気を変える。超ロングパスをダイビングで捕球しタッチダウン。リードを広げ、流れを取り戻す。関西制覇が近づいてきた。

ついに試合終了の笛。喜びを爆発させる選手たち。僕も同じくらい興奮してしまった。

『ROOKS4年ぶり関西制覇 関西1位で東西王座へ【10月28日 神戸大NEWSNET】』

最高の形で舞台を東西王座決定戦へと移すことになったROOKS。日本一への期待はピークに達した。

『いよいよクライマックス。東西王座がさくらボウルの前章となるのか、それとも今年のエピローグとなるのか。最高の雰囲気で迎える残

り 1 ヶ月。ここが勝負の分かれ目となる』

ROOKS 物語は確実に終わりへと向かっていた。

東西王座決定戦、決勝。昨年と同じく関東勢との準決勝をあっさりと突破した関西王者 ROOKS と、昨年の王者ムコジョとの対決となつた。

日本一を決める試合会場の王子スタジアムには、今までと比べ物にならないほど大勢の観客。思い起こせば僕の ROOKS 取材はこの日の記事を読んでからであった。あれから 1 年。僕がスポーツ取材で緊張したのは取材人生で初めてであった。

張り詰めた空気の中、試合が始まる。まずペースを握ったのはムコジョ。動きの固い ROOKS からパスで先制。一方の ROOKS も第 2Q に敵陣残り 2 ヤードまで攻め込むと、試合前から足を負傷していた QB が意表を突くランプレーでタッチダウンを奪い 1 点差。TFP も獲得し、試合を振り出しに戻す。

前半終了間際、タッチダウンまで残り 1,5 ヤードまで攻め込まれた ROOKS だが、ここで DF 陣が奮起。体を張って守りきり、残り 30 秒で攻撃権を奪取。なんとか同点で前半を終えた。

はずだった。

直後 ROOKS の攻撃。スナップを受けた QB が前を向いたとき、目の前にはもう相手 DF3 人が壁となっていた。

選手層が厚く、攻守でメンバーを交代していくムコジョに対し、ほとんどがフル出場する ROOKS。相手の攻撃を防ぎ、ほつとした選手たちの気の緩みを最強の王者は見逃さなかつた。ガードはあっさりと突破され、QB は瞬く間に囲まれた。

しかしそもそも前半残り 30 秒。ランプレーなら時間を稼ぎ、ハーフタイムに逃れることもできた。だがほんの 5 分前、タッチダウンを決めたランプレーで QB の足には限界が来ていたのかもしれない。彼女が選んだのは、リスクを伴うパスだった。

「あっ…」

投じたボールは直接 DF の胸へ吸い込まれ、そのままエンドラインへ。時間が止まった。

選手が後ろへ目をやると、そこには歓喜するムコジョ。スコアボードには「6」。何が起こったか理解できぬまま TFP のプレーに入るが、したたかな王者の攻撃を防げず 7 点差に。挑戦者として絶対にしてはいけないミスからのインターフェースタッチダウンで、ムコジョ勝ち越し。

力の差。過去の記憶。「敗色濃厚」という言葉が誰しも頭をよぎった。

ハーフタイム。ROOKS ベンチからはコーチの怒声。うつむいていた選手が、決意を持って立ち上がる。観客の不安が一層の大きな声援となってスタジアムを包む中、後半が始まった。

攻めるしかない。それでも進めない。何度も攻撃を阻まれる。しかしムコジョも攻めきれない。両チーム動けぬまま第 3Q 終了。残りは最終第 4Q の 8 分間のみ。こう着状態に陥った試合で流れを掴んだのは、後の無い ROOKS だった。

パスをつなぎ攻める、攻める。タッチダウンへ残り 10 ヤード、3 ヤード…ついに 1 ヤードまで来た。

最後に訪れたビッグチャンス。QB が選択したのは、封印してきた捨て身のランプレー。

決まった。タッチダウン成功。

顔色を失い、悲壮な表情をしていた QB からようやく出た雄叫びとガッツポーズ。これで 13

— 14。残りは TFP の 1 点のみとなつた。

同点を狙い、QB が投げる。正確なパスがレシーバーのもとへ。同点、と思った瞬間、彼女の胸からボールがこぼれた。TFP 失敗。歓喜の瞬間はついに訪れなかつた。

終了間際に追加点を取られ敗退。僕は QB にインタビューできなかつた。彼女だけではない。勝てた試合を落とし、涙を流す選手のもとへと走ることができなかつたのだ。記者失格である。

「自滅なので…」

一人涙をこらえて唇を噛み、言葉を搾り出してくれた 4 年生エースに心から感謝したい。

『リベンジならず準優勝 東西大学王座決定戦——女子タッチフットボールの大学日本一を決める東西大学王座決定戦が 11 月 23 日、王子スタジアムで行われた。関西 1 位の神戸大 ROOKS は準決勝を順当に突破するも、決勝で関西 2 位の武庫川女大に 13 — 21 で敗退。日本一に一步届かなかつた。【11 月 23 日 神戸大 NEWSNET】』

この記事で ROOKS を追いかけ続けた 1 年が終わる。それは同時に僕の ROOKS 物語が終了する瞬間でもある。

『大学日本一の座は再び「王者」武庫川女大に。春に誓った「秋の日本一」、東京ドームでのさくらボウル出場権。掴みかけたものを手放してしまった。昨年の東西王座から始まったリベンジ物語は、同じ場所、同じ舞台で終わった』

書き終えた。これで今年の取材が全て終了した。いよいよ 2008 年は僕のラストシーズン。引退を前に、取材し残したことはまだまだある。新たなるスポーツ、そこにあるドラマ。次に僕が恋をするのはどんなスポーツであろうか。

考えた末、記事の最後に僕は付け加えた。

『新たな物語は今日この日から始まる』

僕の寿命はあと 1 年。打倒、ムコジョ。僕は誰よりも燃えている。

—終—

注釈

・文中『』の部分は神戸大学 NEWSNET 委員会によって過去配信された記事の一部である。レポート中の記事における著作権についてはこれを放棄する。

・神戸大学タッチフットボールチーム ROOKS(ルークス) のチーム名は、チームの承認を得た上で明記している。



「自分を信じるということ

—私の就職活動奮戦記—

文学部 西洋史学専修

真鍋 花菜
Manabe Kana

真っ赤なスケジュール帳、膨大な量の就職案内誌…1ヶ月前には見るのも嫌だったものが、今となっては戦友のような存在となっているのに気づきます。

3回生の冬、「参加者はコピーカードがもらえます！」という小さな見出しからフラつと立ち寄った学内の就職説明会。そこでそれからの怒涛の3ヶ月は幕を開けることになりました。

「将来もっともっと輝いた人間になりたい」「こんな仕事に就いて人の役に立ってみたい」そんな思いがその瞬間からじわじわと湧くようになってきました。そこで私の就職活動は、2月の半ばからという、周りの友人に比べてあまりに遅い時期からスタートするものとなりました。

3月に入り、所属するラグビー部がシーズンインを迎えました。最上級生になり、最後の1年です。私は今年から新しく立ち上げたリハビリトレーナー制度の中心メンバーに自ら立候補したこともあり、クラブに対してのやる気も十分でした。そしていよいよ卒業論文を書く学年となり、勉強にも今まで以上に力をいれてがんばろうと意気込んでいました。

しかしそんな私の心情を企業側は知るはずもなく、クラブの時間帯に面接や試験がどんどん組み込まれていきました。着慣れないスーツに身を包み、東京と神戸を何度も往復したことかわかりません。その合間に、新幹線代を稼ぐため

にアルバイトをする必要も出てきました。

気がつけば3月も半ば、クラブも休みがちで、「自分が始めた制度をまったく実行できていない。みんなに背中を押してもらってできた制度なのに迷惑をかけてしまっている」という気持ちだけが膨らんでいきました。そんな気持ちに我慢ができないなり、クラブの友人に相談したところ、

「そりゃあ正直、クラブに全然来んから微妙、と思ってる気持ちもあるで。でもみんなそれ以上におまえががんばってること知ってるから、就活やるだけやってみ。待ってるし。」

と言われました。こんなときにも背中を押してくれるのは、4年間一緒にクラブをしてきた友人たち。彼らの期待に応えるためにも、もう一度とことん就職活動をする決意を新たにしました。

漠然と始めた就職活動ですが、4月になると、「ここなら自分が輝ける」と思う業種がわかつてきました。そして、大学時代に勉強してきたことを生かしたいと思い、「メセナ活動に力を入れた会社」に絞ることにしました。人間の豊かな生活のためには豊かな文化が必要、と考えていた私の考えと一致する企業で働きたいと考えたのです。日本や世界を見渡すと、様々な企業やその創業者が美術館を建て、美術財団を創設しています。たとえば、出光美術館やサントリーミュージアム、大学にほど近い香雪美術館もそ

です。いざれはこういう部署に配属されて働きたいという希望がありました。そして、メセナ活動や美術文化活動にも力をいれているメーカーのI社を第一志望とすることに決めました。

I社の就職試験は、グループワーク・一次面接・二次面接と進んでいく予定でした。グループワークではビジネスゲームが行われ、仕入れ値と卸値を自分で決めてお金を稼ぐという内容でした。今までの生活の中では、このような経験をしたことがなかったので戸惑い、一種の賭けをするような気分で臨みました。結果はグループ6人の中で最下位の成績でしたが、何とかこの選考を通過することができました。

一次面接は、まったく面接の予約が取れなかつたため、ゴールデンウィークをはさんで半月後に面接することになりました。その半月間に、様々な企業の面接に落ちました。I社を第一志望としていたものの、「面接に落ちる=人生を否定されている」という勝手な妄想に陥り、気分が曇っていました。気がつけば、残っている選考はI社のみ。「第一志望のI社しか残っていないなんて、これはまさか運命?」などと思う反面、非常な不安もありました。

ゴールデンウィークには東京で三商戦が開かれ、優勝することができました。その遠征の帰り、不安を抱えた私を元気づけるため、部活の友人たちがディズニーランドへ連れて行ってくれました。彼らの計画は大成功で、私は心身ともにリフレッシュし、三度目の正直と言わんばかりにやる気を取り戻すことができました。

ディズニーランドに行った翌日に行われたI社の面接は、「自分の大学時代にしてきたことを25分間で発表する」というものでした。志望動機などは一切聞かないと事前に会社の方からも言われていたので、志望動機恐怖症のこ

とも忘れ、私は4年間続けたラグビー部の話を

しようと心に決めていました。

いざ話し始めると、クラブでの今までの辛かったこと、楽しかったこと、達成感を感じたことなどがすべて頭に思い浮かび、思わず涙が出てきました。それだけでなく、自分がクラブを通して考えたこと、そしてそれをいかに実行し、反省して次に生かしたかという話をゆっくりと確実に伝えたところ、

「あなたの話には説得力がある、そして何よりも訴えかける力が目から伝わる。」という言葉をいただきました。そのような言葉を、たった一度会っただけの面接官から言われると思わず、また感激して涙ぐんでしまいました。

その面接には合格し、最終面接を迎えることとなりました。最後に残った会社の最後の面接。この頃には、I社の商品は自信を持って売れるという気になっていました。自分は絶対にこの会社で働きたい、この会社なら自分の力が最大限に発揮できるはずだ、と言い聞かせながら乗ったJRの電車でしたが、一本の車内アナウンスで思わず凍りつきました。

「ただいま尼崎駅と大阪駅の間で人身事故が起おり、電車が止まっております。大阪への到着予定時刻は未定です。」

運命とはいたずらなものです。他の私鉄に乗り換えていこうと決意し、駅を飛び出しましたが、どう考えても面接には遅刻してしまう。私は急いで会社に連絡し、何分に自分が到着できるのかなどという情報を逐一連絡することにしました。

私鉄に乗り換えて大急ぎで大阪に向かいましたが、面接には結局30分も遅刻してしまいました。当然、頭の中は真っ白。控え室でも放心状態でしたが、徐々にI社に対する熱さを取り戻すことができました。

面接が始まり、志望動機や学生時代にがん

ばったこと、勉強のことを話しているうちに、これまで起こったことが走馬灯のように蘇り、またもや涙が流れてきました。面接官はこの涙に注目し、

「感受性が豊かだけど、お客さんに怒られたら泣いちゃうんじゃないの？」

「そんなに感情をむき出しにしてたら、お客さんを怒鳴ってしまったりするんじゃない？」と厳しい言葉をかけられました。でも私は、自分がどれだけ真剣に考えてきたかということを自分の涙が表している、怒られても絶対に泣きません、と伝えました。それだけでなく、I社で働きたいという気持ちがこれほど起こった理由も説明しました。自分の考えていることをこれでもか、というほど話し、あっという間に最終面接の時間が終わってしまいました。

涙目で控え室へ戻ると、人事の方や面接を待っていた人たちに驚かれました。なぜそのようになったのか説明しましたが、それでも人事の方は、「そんなに恐ろしい面接だったのか…」と絶句していました。そして、涙目の私を見て、これから面接を受ける学生たちの空気も固まってしまっていました。面接からの帰り、その日一日を反省し、「遅刻して泣いたのにこの会社に受かったら、もうこれは運命だ」という結論を導き出しました。

その日のアルバイトを終え、家に帰ってパソコンを開いてみると、「内々定のおしらせ」というメールが。一瞬何が起こったかわからませんでしたが、何度も読み返すうちに、自分の前に敷かれた人生というレールに、少しだけ光が照らされたように感じました。こうして5月23日、私の就職活動は幕を閉じたのです。

文学部は就職に不利だ、なんて誰が言い始めたのでしょうか。私はそんな風に感じる必要はないと思います。自分の考えていることをしっ

かりと自分の言葉で伝えるということ。そんな当たり前のことが、就職活動だけでなく生活のあらゆるシーンに必要不可欠なことだと考えます。これさえできれば、誰もが就職活動という壁を乗り越えることができると感じます。私は、第一志望として考えていたI社の試験でその力が発揮されたからこそ、今があると感じます。

そしてもうひとつ大切だと感じたこと、それは自分を信じることです。このレポートの中で、私は何度も「運命」という言葉を記しましたが、自分を信じて行動した結果が、すべて「運命」という言葉に集約されていると感じています。まさに「運命は自分で切り開くもの」という格言のとおりでしょう。単なる思い込みやイメージトレーニングだといわれるかもしれません、自身の今までの経験や力を信じてあげないで誰が信じるというのでしょうか。「運命だ」と言ってすべてをかたづけるわけにはいきませんが、むしろそれくらい自分の運命を決めつけることも時には大事だと思います。

私はこれからも、真っ赤な手帳と、就職案内誌、そして自ら課した運命を片手に、文学部の多くの後輩たちに就職活動のアドバイスを伝えたいと思っています。

